

インノチェンティ捨子養育院における「養護」(cura) がもつ 意味の変遷—1400年代から1900年代へ

Changes in the meaning of “care” in the Hospital of the Innocents: From the 1400s to the 1900s

オムリ 慶子*

Abstract

This paper aims to clarify the various meanings of child care at the Hospital of the Innocents (Spedale degli Innocenti—hereafter abbreviated to be read as the Innocenti). The Innocenti was established in Florence, Italy in 1445, and accepted only abandoned children.

There are many studies on the Innocenti, from its architecture to historical research on it as a hospital raising abandoned children. This year, 2019, marks the 600th anniversary of Brunelleschi's construction of the Innocenti.

A research project launched in 2007, resulted in research papers and booklets. In this study, I restructured the outcomes of the research project, according to the different eras, to reveal the Innocenti's child care programs.

In the first period, from 1419 to 1580, people atoning for their vanity saved and cared for abandoned children. In the second period, 1580 to 1700, abandoned children were placed in a manger between the Virgin Mary and Joseph's statue, and cared for as the incarnate Jesus. During the third period, 1700 to 1875, foreign control modernized the Innocenti, and child care based on science began. In the fourth period, 1875 to 1900, the Innocenti became a public welfare facility, and doctors and nurses provided child care as a welfare service.

キーワード：インノチェンティ捨子養育院、養護と魂の救済、養護と幼子イエス

本研究の背景と目的

インノチェンティ捨子養育院 (Spedale degli Innocenti)¹⁾は、ルネサンス期における建築学的・芸術学的視点から有名であり、またそれと同時に1400年代初期から捨子のみを収容するポスピタル (Ospedale) としても有名である。

インノチェンティ協会 (Istituto degli Innocenti) のHP²⁾によれば、インノチェンティ捨子養育院はイタリア・ルネサンス期の著名な建築家であるフィリッポ・ブルネレスキ (Filippo Brunelleschi, 1377-1446) によって設計され、1419年建築が着手された。1419年から今年 (2019年) で600年が経過し、インノチェンティ捨子養育院は今年2月11日に、イタリア共和国大統領セルジョ・マッタレラ (Sergio Mattarella) を招いて600周年記念式典が行

われたことが紹介されている。現在のインノチェンティは、0歳から3歳までの保育所 (asilo nido) と3歳から6歳の幼児学校 (scuola d'infanzia) の他、0歳から6歳までの一貫保育教育を行うジランドラ (Girandola) という名称の保育教育施設、そして児童保護ホーム (Casa Bambini)、母子ホーム (Casa Madri)、母子支援施設 (Casa Rondini) があり、常に約200人の子どもがインノチェンティ内で保育を受けている。現在イタリアは、日本の幼保連携型認定こども園同様、2017年イタリアの委任立法65条 (decreto legislativo n.65) によって0歳から6歳児に平等な保育教育機会を保障するため、教育省管轄の下で幼保一貫保育教育を行うことが決定され、現在は移行時期にある³⁾。

インノチェンティ捨子養育院を養育院としての視点から取り上げた日本における先行研究として、前

* Keiko OMRI 教育学部教授

之園と高橋の研究がある。前之園の1995年の研究『フィレンツェにおけるインノチェンティ捨て子養育院の創設とその発展について』⁴⁾では、絹織物ギルドがインノチェンティ捨て子養育院の創設にかかわった1400年代から、1700年代のトスカーナ大公国によるインノチェンティ捨て子養育院支配、1800年代には様々な内部改革が行われるなかで、インノチェンティ捨て子養育院の在り方がどのように変化したのかを明らかにしている。そして1996年の研究『18世紀フィレンツェのインノチェンティ養育院における捨て子の養育について』⁵⁾では、1800年代のインノチェンティ捨て子養育院での捨て子の実態を、子どもが捨てられるときにつけられていた手紙や、乳母のシステム、捨て子の命名をめぐる明らかにされている。特にイタリア統一までは、乳母の管理に教区司祭が関わっていたことは興味深い。そして『フィレンツェ・インノチェンティ捨て子養育院の創設初期における子どもたち』(1998)⁶⁾では、インノチェンティ捨て子養育院古文書館(AOIF: Archivio dell'Ospedale degli Innocenti di Firenze, 以下インノチェンティ古文書館と略す)の1400年代初期から中期の記録である『乳母と乳児』(Balie e Bambini)⁷⁾を用いながら、当時の捨て子の実態を描き出している。

一方、高橋の『捨て児たちのルネッサンス—15世紀イタリアの捨て児養育院と都市・農村—』(2000)⁸⁾では、主に1400年代を中心に、インノチェンティ捨て子養育院の運営体制や捨て子に関する統計、遺棄の方法や理由、乳母による慣習や契約、乳母による子どもの扱い、養育院内の生活の様子や子どもの名付けについて、成長後の仕事や結婚などの詳細がインノチェンティ捨て子養育院だけでなく、イタリア諸都市の様子や当時の習慣等と比較しながら論じられ、1400年代のインノチェンティ捨て子養育院の全貌を様々な方向から立体的に明らかにした研究といえる。

インノチェンティ捨て子養育院そのものを扱った海外の研究は、ブルスコリの『フィレンツェのサンタ・マリア・デッリ・インノチェンティ捨て子養育院の創設から現代まで』(Bruscoli, *La Spedale di S. Maria degli Innocenti di Firenze dalla sua Fondazione ai giorni nostri*, 1900)⁹⁾やサンドリ(Lucia Sandri)の研究、『インノチェンティ捨て子養育院の経済状況—ドン・ヴィンチェンツォ・ボルギーニと1579年の破産』(*L'attività di banco di deposito dell'Ospedale*

degli Innocenti. Don Vincenzo Borghini e la 'bancarotta' del 1579, 2001)¹⁰⁾等があるが、2007年からインノチェンティ協会会長のマッジ(Alessandra Maggi)、そしてサンドリらを中心にフィレンツェを含むトスカーナの研究者たちの研究プロジェクトが始まり¹¹⁾、インノチェンティ捨て子養育院に残されている1400年代から1900年代の古文書のシステム化とともに、インノチェンティ捨て子養育院の建築的・芸術的研究の他、捨て子に関する研究などが進み、その中で新しいインノチェンティ博物館(II Museo degli Innocenti)を創設するなど、歴史的な研究成果が目に見える形で示された。博物館ではまずインノチェンティ創設にかかわった人物たちの彫像や肖像画、そして関連する芸術作品等が示され、インノチェンティ捨て子養育院の歴史が紹介される。その後、インノチェンティ捨て子養育院に保護された膨大な数の子どもたちの記録から、主だった文書が紹介され、捨て子の名前のついた無数の引き出しの中に、養育院に遺棄された子どもたちにつけられていた、将来親が子どもを迎えに来た時に自分の子どもを判別するための「目印」(il segno) —布切れや十字架、二つに割られた(切られた)片方みのメダイユや聖画など—が展示されている。そして1900年のパリ万博に展示されたインノチェンティ捨て子養育院内部の様子を写した写真が展示され、当時のインノチェンティの生活を知ることができる。最後には、この施設で育てられた存命の人々のビデオインタビューを視聴できるコーナーがあり、そこでは面会に来た両親の姿の思い出や、結婚後に自分のルーツを知りたいと思いインノチェンティに問い合わせるまでの自分という存在への葛藤といった、個人的でセンシティブな感情を淡々と、あるいは悲しげに、または吹っ切れたように語っている証言者たちの生の声がある。

本研究で用いる文献は、このプロジェクトに関する研究書として、インノチェンティ・プロジェクトに参加した研究者の論文集『イタリアの子どもたち—1861年から1911年のインノチェンティと子どものための国家プロジェクトの誕生』(*Figli d'Italia. Gli Innocenti e la nascita di un progetto nazionale per l'infanzia. 1861-1911*, 2011.)に掲載された9編の論文¹²⁾と、『インノチェンティ博物館』(*Il Museo degli Innocenti*, 2016)¹³⁾、『子どもたちのルネッサンス—1400年代と1500年代間のインノチェンティと

子どもたちの受け入れ』(*Il Rinascimento dei bambini, Gli Innocenti e l'accoglienza dei fanciulli tra Quattrocento e Cinquecento*, 2007)¹⁴⁾、『インノチェンティと都市 ―設立からメディチ大公国までの養育院』(*Gli Innocenti e la Città, L'Ospedale dalle origini al Granducato mediceo*, 2007)¹⁵⁾のサンドリによる解説を用いる。そして、これらの研究で子どもたちの生活の様子が明らかにされているものを、インノチェンティ捨子養育院の時代区分ごとに、以上の文献からその時代の特徴を再構成し、子どもを取り巻く大人が子どもに与える「養護」(cura)という視点から、インノチェンティで行われていた養護の背後にある意味や背景を時代ごとに明らかにするのが本研究の目的である。

以下の年代区分は、インノチェンティ協会が示す区切り¹⁶⁾にならう。

1. 1419年-1580年、魂の救済としての養護

1400年代のヨーロッパでホスピタル (Ospedale) といえ、病人の世話や巡礼者など旅人の宿泊所であり、そこで捨子を養育することもあったが、フィレンツェでは捨子のみを保護を対象にするホスピタル、つまり養育院 (Ospedale) の建設が計画された。

フィレンツェでは1348年にペストが流行し、人口が減少するとともに捨子が増えた。フィレンツェには当時、6つの大きなホスピタルと無数の救貧院 (ospizio) や様々な援助会があり、病人や巡礼者と一緒に捨子が保護されていた¹⁷⁾。そしてこれらのほとんどがギルドが運営しており、13世紀から15世紀のフィレンツェの代表的なギルドは、絹、商人 (フィレンツェ語で *calimala*)、両替商、判事、公証人、医者や薬草屋で¹⁸⁾、大きな影響力を持っていた。

1419年ボル・サンタ・マリア (Por Santa Maria) と呼ばれる絹織物ギルドは、フィレンツェ郊外に位置するプラートの商人フランチェスコ・ダティーニ (Francesco Datini, 1335-1410) の遺産で土地を買い、ブルネレスキの建築プロジェクトのもとで捨子の保護のみに特化した新しいホスピタル、つまり養育院 (Ospedale) の基礎作りが始まった。養育院は、「サンタ・マリア・デッリ・インノチェンティ捨子養育院」(Spedale di Santa Maria degli Innocenti) と命名され¹⁹⁾、1445年1月24日完成し、絹商人パチーニ (Lapo di Piero Pacini, 1445-1446)²⁰⁾ が最初の院長となった²¹⁾。

同年2月5日 (フィレンツェ暦では1444年)²²⁾ 正式に開院²³⁾すると、その日のうちに最初の新生児が受け入れられ、その日の聖人である聖女アガタの名前をとってアガタ・ズメラルダ (Agata Smeralda) という名が付けられた。

この時の様子がインノチェンティ古文書の『乳母と子どもたち』(Balie e fanciugli)²⁴⁾に、院長のパチーニによって以下のように記録されている。

アガタ・ズメラルダという名の最初の女兒は、聖アガタの日である2月5日の14時に我々の養育院に置かれていた。洗礼は受けており、聖水盤 (Pila) に入れられていたという。連れてきた女性の正式な名前はモンナ・アントニア、またはモンナ・ジョヴァンナ・(xxx 判読不明) と呼ばれている。粗末な羊毛の布を4枚に裂かれたうちの2枚と、4枚の麻布、頭にかぶせるための麻布と2枚の新しいスウォドリング (fascie) とともに、この女兒は連れてこられ、そのほかには何の印も残されていなかった。

西欧の捨子受け入れ窓口としてよく語られるのは「回転式窓口」(ruota) であるが、実際1400年代のイタリアでは様々なものが使われていたようである。例えばヴェネツィアでは船 (ヴェネツィア語で *scafetta*)、ナポリでは「回転式窓口」、トスカーナでは聖水盤であった。インノチェンティの聖水盤は、もともとはインノチェンティ捨子養育院の外部アーケードにあり、女性専用の小さな礼拝所のそばであった²⁵⁾。

1500年代には聖水盤が窓にはめ込まれ、のちに受け入れる子どもの年齢制限や外部からの安全性を担保するために鉄の格子をはめ、「鉄格子の受け入口」(buca ferrata) と呼ばれるようになり、トスカーナの他の地域でもこれを模倣し「鉄格子の受け入口」が広く普及した²⁶⁾。

1465年の1年間に200人以上の新生児が受け入れられ、1484年にはインノチェンティは約1000人を抱えるようになった²⁷⁾。西欧では女兒が結婚するときはその親が婚資金を負担しなければならず、親たちはその負担から開放されるために、どこの養育院でも女兒の捨子率は60%~70%²⁸⁾と男児より高かった。子どもは受け入れ後、当番の乳母によって性別、服装、聖水盤に置かれていたもの、身につけて

いた手紙や目印など注意深く観察され記録された²⁹⁾。

特に気を付けることは、子どもが洗礼を受けているかどうかを示す目印である。子どもの産着であるスウォドリングの間に塩が入っていれば洗礼済みであるが、小麦であればすぐにサン・ジョヴァンニ洗礼堂 (bel san giovanni) で洗礼を授けた³⁰⁾。当時は乳児の死亡率が50%以上と高く³¹⁾、洗礼を受けないまま死亡すると魂が救済されないと考えられていたからであろう。

その後、インノチェンティ捨子養育院住み込みの「家の」(di casa) 乳母と呼ばれる乳母が、田舎の乳母が見つかるまで世話をした。外部の乳母に託すのは、田舎の方が空気がよいのと、都会の乳母と比べたら料金が安いという理由からである。授乳は1歳半(18か月)まで続いた³²⁾。田舎の乳母に2歳まで託された乳児は、乳が足りない場合ヤギの乳を与えることができた。1500年代には、牛乳の人工乳や「哺乳コップ」(bicchierini col pippio) のようなものが試されていたようである³³⁾。

離乳食はパンがゆが基本であったが、貧しい農家の食事は子どもにとって十分な栄養にならず、死亡したり飢餓状態で養育院に戻ることがあった。インノチェンティでは、きちんとした食事: 朝食、昼食、おやつ、夕食が保証された。インノチェンティ捨子養育院の裏 (via della Colonna) には農園があり、十分な食料が供給されていたようである。麦、豆類、肉、果物、野菜など、所有地から得ることができ、インノチェンティ内には、かまどや畜殺場があった。1500年代半ばには、院長や神父のためにとり置かれた魚類 (フィレンツェは内陸のため当時は魚が贅沢品だったことが想像される) も子どもたちのテーブルに乗ることがあったといい³⁴⁾、インノチェンティ捨子養育院の子どもたちは、一般的な家庭で育てられている子どもよりも食生活が豊かであったようである (ただし、女兒は男児より配給は少なかった)。

着る物については、厳しい儉約の規則がコムーネにあるため、インノチェンティ捨子養育院ではユニフォームを着せていた。乳児は通常麻のスウォドリングで巻かれていたが、インノチェンティの時代には巻かれるのは胸までで、腕も足も比較的自由に動かせたらしい。このことはインノチェンティ捨子養育院の正面アーケードのアンドレア・デッラ・ロツ

ビア (Andrea della Robbia, 1435-1525) による円形の焼物にあるプットー (子ども像) に見ることができる³⁵⁾。

大きな子どもの着る服は男子と女子用にほとんど差がなく、違いはスカート、ブラウス、マント、流行の服くらいで、学校に通う大きな子どもになると、胸にインノチェンティ捨子養育院のシンボルであるプットーの印のついた黒い服を着ていた³⁶⁾。

外部乳母に託されていた子どもは、皆がインノチェンティに戻るのではなく、乳母の家にとどまるか、他家の養子になったりした³⁷⁾。インノチェンティに戻ってきた子どものうち、働く年齢になっている子どもは、5、6歳の男児は学校に行き、7、8歳になると見習いに出され、13-14歳から工房の使用人となった。給与は商人がその息子に払うのとはほぼ同等のものであり、男児の徒弟奉公や見習いは、経験を積むために商館に派遣される商人の息子と似た関係であった³⁸⁾といい、インノチェンティ捨子養育院の子どもたちの待遇は富裕な商人の息子のようだったことがわかる。また、僧職の道に入る者もいた³⁹⁾。

1500年代中頃、人文主義者 (umanista) であり養育院院長であるドン・ヴィンチェンツォ・ボルギーニ (Don Vincenzo Borghini, 1515-1580) は、熟練した教師の下で読み書きを学ぶことを男児に義務付け、司教などの地位の高い神父たちが誕生している⁴⁰⁾。

女兒たちは、裕福な家庭に初歩的な家事を学びに行った。このようにして彼女たちは自分の将来のための婚資金を稼ぎ、母と娘の関係を基礎にした教育モデルを学ぶこともでき、この時代においては他家での家事手伝いは女兒の教育の基礎として有用であったという⁴¹⁾。

また、インノチェンティでは、男児には歌や音楽や絵画や彫刻の学びの機会も与えたようである⁴²⁾。

通常この時代の子ども教育といえばキリスト教教理を学ばせることであったが、1400年代のフィレンツェでは人文主義 (Umanesimo) の影響で、誕生から7歳まで (infanzia)、14歳まで (puerizia)、28歳まで (adolescenza) と子どもたちは年齢別に分けられ、身のこなし方や食事の仕方、身だしなみ、身体を清潔にすること、学問の学び方を年齢別クラスで学んだ。これはインノチェンティ捨子養育院の子どもたち、それは不義のもとに生まれた子どもも

例外ではなく、同様の教育を受けていたという⁴³⁾。

ルネサンス時代のインノチェンティ捨子養育院での生活や教育は、一種の裕福な家庭のような様相をしており、教育も十分なものを受けていたことがわかる。

このことについてサンドリの興味深い考察がある。「道にいる子どもを拾い上げ子殺しから救うことは、象徴的に言うなら、サン・ジョヴァンニや他の荘厳な祝祭のために、ギルドや市(civico)の権力者の代理人が「聖職者」とともに行列し、コムーネ全体の悔い改めのために一体となるようなものだ。フィレンツェ・ルネサンスでは、子どもを引き受けることは、公的文化的な価値があり、子どもたちを育て人格形成を行う家族のレベルにおいて道徳化が欠乏している社会に救済をもたらす。」⁴⁴⁾

つまりルネサンス期のフィレンツェにおいて、嫡子も庶子も同様に養護する、つまり子どもの生命や生活を守り教育することは、それにかかわる養育院長や乳母たちの使命だけでなく、コムーネ全体にかかわる神に許しを請うイベントであったということなのではないのか。当時のフィレンツェはインノチェンティ捨子養育院を設計したブルネレスキ、インノチェンティ捨子養育院のシンボルであるスウォドリリングをした子ども像の円形の焼物を作成したアンドレア・デッラ・ロツピア、その他にもフィレンツェで活躍した画家ジョットー、ギルランダイオ、ボッティチェリ、フラ・アンジェリコ、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ、ラファエロらの豪華絢爛な絵画や建築物、彫刻、焼物などに飾られたルネサンスが花開いていた。その一方で、インノチェンティから徒歩数分圏内にあるサン・マルコ寺院の僧侶サヴォナローラ(Girolamo Savonarola, 1452-1498)が1497年2月7日聖火曜日のカーニバルの日に、虚栄に満ちたフィレンツェを救済すべく「虚栄の焚火」(falò delle vanità)によって、人々に墮落からの回心を訴えた。「虚栄の焚火」が行われたシニョリア広場では、装飾品や楽器、芸術作品等が火に投げられ、その後、市民の熱狂的な宗教儀式や行列が続いた⁴⁵⁾という。

このようにインノチェンティ捨子養育院は、当時の人文主義者や建築家たちの理想郷としての「理想都市」(Città Ideale)であると共に⁴⁶⁾、コムーネ全体の悔い改めと贖罪のシンボルであり、見捨てられた子どもたちを、裕福な家庭の子息や子女並みに養

育したことは、一般の子どもたちよりもより良い生活と教育を保証することによって、コムーネの住民たちの虚栄の罪の償いの意味があったと考えることができるのではないだろうか。

2. 1580年-1700年、受肉化した幼子イエスとしての養護

ボルギーニの子どもたちへの手厚い政策から財政難に陥ったインノチェンティは、財政立て直しのための方策を打ち出した。

一つ目として子どもたちの早期の自立である。男子は19歳になるとインノチェンティを出て自活させた。8歳から15歳の女兒は、家事手伝いとして町の裕福な家庭に預けられ、36歳以上の女性はインノチェンティに近接するオルバテッロ・ホスピス(Ospizio di Orbatello)に収容された。自立に向けての教育は、夜明けから日没まで厳密なプログラムのもとで行われ、教育内容は、キリスト教教理、読み書き、行儀などであった。そしてその後、商人見習い、僧職に入る者、さらに高い教育を目指すものがあつた。女兒は住み込みの家事手伝いとなるか、裁縫や織物の仕事をインノチェンティ内で行った⁴⁷⁾。

二つ目は、乳母に支払う賃金の経費削減である。1667年から、未婚のまま子どもを産んだ女性を内部乳母として⁴⁸⁾養育院内に住まわせた。未婚の乳母に給与が出たのか、無報酬であったのかは定かではないが、外部乳母に乳児を託す賃金分が節約できたらしい。

この時期の女兒を取り巻く状況は厳しいものがあつた。16世紀中ごろから後半にかけて起こった対抗宗教改革の流れで、カトリック教会は自ら襟を正す必要があつたためと考えられる。特に不義の関係から生まれた女兒(nocentine)の生活は厳しいものがあつた。インノチェンティ捨子養育院の外で工芸や糸巻き、織物職人として生計を立てる女性たちは長時間労働を強いられ、養育院に戻ってくる女子が多かつたという。また、1622年には乳母とインノチェンティの女性(嫡子も庶子も)の部屋を別にしている⁴⁹⁾。それは養育院で育った女性の処女性を保つために、乳母から余計な知識を入れられることを避けるためだったようである。

三つめは子どもの衣料の管理である。1600年代の養育院では、衣類の数や、新しいものと古着、乳母

間の衣類の貸し借りなど、地方長官によって細かく記録し損失を防いだ⁵⁰⁾。

四つめは入所する子どもの制限である。今までインノチェンティで使用されていた聖水盤は新生児のみを受け入れるというのが建前であったが、受け入れ窓口はさらに厳しく二重の鉄格子をはめ込んだ「鉄格子の窓」(finestra ferrata)となった。この鉄格子の間を通ることができる新生児のみを受け入れることになったのである。子どもの受け入れ窓口は正面アーケードの北(左突き当り)に移動させ⁵¹⁾、現在も鉄格子とともにその様子を見ることができる。その上部のフレスコ画には、二人のブットーとともに「父、そして母が私を捨て、主が受け入れてくださった」(PATER, ET MATER DERELIQUERUNT NOS, DOMINUS AUTEM ASSUMPSIT.)という言葉が書かれている。1660年(A.D. MDCLX)のものである。この鉄格子の奥に、マルコ・デッラ・ロブビア(Marco della Robbia, 1468-1534)の作なる彩色されたテラコッタの彫像である聖母マリアとヨゼフが、空っぽの飼い葉桶の中を見つめて祈る姿がある。捨てられる新生児は鉄格子を通して、この飼い葉桶の中に置かれるのである。

サンドリは、この行為を「イエスは飼い葉桶の中の捨てられた子どもの内に受肉した⁵²⁾と表現しているが、この時代のインノチェンティの子どもたちは、前の時代と打って変わった節約と辛い労働、そして教育という名の厳しすぎるコントロールのもとで子ども(特に女兒)たちは生活した。子ども達を取り巻くこのような厳しい状況のもとで、新しい子どもの受け入れ窓口となった鉄格子の窓を通して飼い葉おけに捨てられた乳児は、聖母マリアとヨゼフに見守られ受肉化した幼子イエスであるとともに、「神の子」として養護するという、インノチェンティの大人たちにとってのせめてもの象徴だったのでないだろうか。

3. 1700年-1875年、科学による養護

1700年代になると、インノチェンティ捨子養育院に大きな変化がみられるようになる。1770年、絹織物ギルドによるインノチェンティ支配が終わり⁵³⁾、慈善の新しい形が生まれた。つまり、公的権限による捨子救済の世俗化である⁵⁴⁾。

そのきっかけとなったものとして、フィレンツェへの外国支配⁵⁵⁾があげられるだろう。アルザスに起

源をもち、フランチェスコ1世の代にハプスブルグ=ロレーナ家(Asburgo Lorena)となるロレーナ侯爵家が、1737年フィレンツェに到来した。同年メディチ家最後のトスカーナ大公ジャン・ガストーネ・デ・メディチ(Gian Gastone de' Medici, 1671-1737)の死をもって、ロレーナ家のフランチェスコ・ステファノ・ディ・ロレーナ(Francesco Stefano di Lorena, 1708-1765)がトスカーナ大公(フランチェスコ1世:在位1737-1765)となり、1782年までトスカーナのすべての養育院を含む全ホスピタルの代表者となった⁵⁶⁾。ハプスブルグ=ロレーナ家は1860年までトスカーナに君臨するが、フィレンツェ人と融和的な関係を持っていたようである。1791年ロレーナ家のフェルディナンド3世(Ferdinando III:在位1790-1801, 1814-1824)は、養育院を含むホスピタル改革に、インノチェンティの代表である法学者バディア(Giovanni Neri Badia)に加わるように呼び掛けている⁵⁷⁾。特にこの時期に、フィレンツェの養育院や慈善施設を連結させた行政は、ロレーナ家による改革と啓蒙主義思想の結果であると評価されている⁵⁸⁾。

1799年3月フィレンツェはナポレオンによるフランス軍に占領され、さらに1800年から1816年まで再びフランス軍に占領されるが、ハプスブルグ=ロレーナ家の摂政マリア・ルイーザ(Maria Luisa d'Asburgo Lorena, 1791-1847)の下でフィレンツェの慈善施設、特にインノチェンティについて改革が行われた。1805年12月7日マリア・ルイーザは、嫡子の入所を制限することと、乳母と捨子のケアに厳しい衛生基準を科すことについての通達を告示した⁵⁹⁾。嫡子の入所制限は、財政改革の一端であったが⁶⁰⁾、家庭の貧困から乳児を養育できなかつたり母乳が出ない場合は、貧困証明を提出することによってインノチェンティに乳児を入所させることができた。また授乳期が18か月から12か月になったが、乳母の給与が上がっているのは⁶¹⁾、ロレーナ家のフランチェスコ1世のもとでコムーネの財政回復と功績債務を減少させることができた⁶²⁾ことが考えられるだろう。ハプスブルグ=ロレーナ家のマリア・ルイーザとナポレオンが1810年婚姻関係を結び、フィレンツェはナポレオン失脚の1814年までフランス政権下となる。また、フェルディナンド3世(Ferdinando III:在位1790-1801, 1814-1824)の時代には、貧困で母乳が出ない嫡子の子どもがいる家

庭に補助金を支給し(1816年)、1818年2月17日付けの法令には、このような乳児を抱える貧困家庭に必要な費用はコムーネの責任であることが明記され、1865年コムーネや県の法令にも組み込まれた。このことはヨーロッパで回転式捨子受け入れ窓口を閉鎖する議論が高まっていることを見越しての措置でもあった⁶³⁾。

1780年には、ロレーナ家のレオポルド大公(Leopoldo I:在位1765-1790)によって、ナンノーニ(Lorenzo Nannoni)教授による外科医の養成コースをインノチェンティ内に設立し、1802年には、小児科医のガエターノ・パッローニ(Gaetano Palloni)によって、小児科を教える学校がその中に創設された。小児科学の誕生である。また、インノチェンティの前の時代に36歳以上の女性を収容していたオルパテッロ・ホスピスは、1704年婚外子を宿している女性のための隠れ家として、1763年には公的な助産婦の学校と統合し、1815年11月21日フェルディナンド3世によってインノチェンティ捨子養育院の中に貧しい妊婦のための産科医院(Ospizio di Maternita')⁶⁴⁾が設立された。

その他の科学的進歩として、衛生管理、人工乳、そして天然痘のワクチン接種があるだろう。1806年組織的な衛生管理のおかげで子どもの死亡率は減り⁶⁵⁾母乳不足には人工乳で対応できるようになった。そして天然痘ワクチンも死亡率の低下に寄与したにちがいない。

1818年から1833年にかけて、インノチェンティ捨子養育院が王立として再確認された「ホスピタルと慈善院の代表委員会」(Deputazione sopra gli ospedali e i luoghi pii)で、市の様々な保健福祉施設とともに国務省(Segreteria di Stato)に統合された⁶⁶⁾。

イタリア統一の翌年(1862年)には、インノチェンティ捨子教育院は内務省管轄の慈善団体(Opere Pie)になった⁶⁷⁾。捨子受け入れ窓口の閉鎖の是非についてはイタリアを含むヨーロッパ中で議論されてきたが、1875年6月30日⁶⁸⁾、ついにインノチェンティの「鉄格子の窓」は閉鎖され、匿名遺棄の時代は終了した。これ以降は、インノチェンティは事務所を通して手続きをしたうえで子どもたちを受け入れるようになった。

以上のようにこの時期のインノチェンティ捨子養育院は、外国支配によって養育院の在り方が近代化

し、科学を基礎とした新しい養護の在り方が生まれたのであった。

4. 1875年-1900年、福祉としての養護

慈善団体に関する法律が施行された1862年から、公的慈善における国家の管理が強化され、1888年には、内務省(Ministero dell'Interno)管轄に入った⁶⁹⁾。1890年クリスピ法(Legge Crispi)により、インノチェンティは慈善団体(Opera Pia)から公的福祉支援施設(Istituzione Pubblica di Assistenza e Beneficenza)になり⁷⁰⁾インノチェンティは法的に孤児院(brefotrofio)の枠組みに入った。

1875年の「鉄格子の窓」閉鎖以来、複雑な入所の手続きが必要となった。インノチェンティでは、表向きは出生届と洗礼証明書を提出できる嫡子のみを受け入れるようになったが、民法第376条にあるように予測できず庶子になった理由を書いた証明書を添えることによって受け入れが可能になるため、出産を助けた医師や助産婦、母親が所属する教区司祭も、やむをえず庶子になったという証明書を出していた。また、出産がまだ記録されていない場合は、秘密裏の妊娠(gravide occulte)として、インノチェンティで生まれたことにすることができたという⁷¹⁾。このようにインノチェンティには「鍵で閉じられたままの門と、必要に応じて慎重に開けられる門」⁷²⁾があったのである。子どもを受け入れる事務所では、子どもを連れてきた人物に子どもを受け入れたという証明書の発行をした⁷³⁾。

また、1887年11月5日内務省は、すべての子どもと母親に、梅毒の有無についての医師の診断書や申告書の提出を求めた⁷⁴⁾。1888年クリスピ法により、県知事が公衆衛生を実用化することを決定し、フィレンツェ衛生協会(Società fiorentina di igiene)の理事であるガッダ(Gadda)が病院改革を行い、この衛生改革はその後の多くの捨子養育院の保健衛生方針となった⁷⁵⁾。1890年の衛生改革では、インノチェンティの部屋を改装し、必要な調度品や設備が整った実験室や診察室に変わった。またこの衛生改革で医師が常駐することになり、医師は一日2回子どもたちを見て回り、子どもに病気の兆候が見えたら診察し、他の子どもたちも感染していないか観察室で子どもの様子を診察した⁷⁶⁾。

1891年にはインノチェンティの入口の門は、アーケードの正面中央の現在の場所に移動し⁷⁷⁾、その門

右横には子どもが伝染病にかかっていないか観察するための部屋が設けられた⁷⁸⁾。これにはあらゆる感染症・伝染病から入所児を守るという意図があったからであろう。1892年には、「慈善施設の医師のための規則」(Regolamento per i Medici del Pio Istituto) が可決され、ここには医師の役割としての仕事内容について書かれている⁷⁹⁾。

1893年には医務室が導入され、疾患している病気によって3つの部屋(一般的な病気、伝染病、梅毒)にわけられ⁸⁰⁾、電話が引かれた観察用の2つの部屋、未熟児用の保育器、そしてインノチェンティの子ども用の人工乳を取り入れ、一般にも販売した⁸¹⁾。

1900年、第5回イタリア小児科学会(IV Congresso Pediatrico Italia)と同時開催で第2回授乳の衛生についての会議(II Congresso per l'igiene dell'allattamento)がインノチェンティで開催された⁸²⁾。母親の母乳が乳児の死亡率を下げることを示され⁸³⁾、母乳を与えた499人の乳児のうち死亡したのが59人のみとして、母乳の効果が明らかにされた⁸⁴⁾。しかし乳母が足りなかったため、インノチェンティの医師たちは、未婚の母に目を向け、また子どもを産んで手放す出産施設とも手を組み、母乳不足を補った⁸⁵⁾。

梅毒についてはより注意が払われた。新しい子どもが入所した時、まず子どもは預け入れの部屋近くの看護婦に託され病気や感染症の有無が調べられる。医者に見せて感染症の有無がわかるまでは、人工乳を与え、着替えさせていた。入所後は、子どもにつけられた番号と同じ番号を子どものベッドや、子どもに関する記録が書かれた書類や目印につけられて、他の子どもものものと混同しないようにするとともに、洗濯ものを他の子どもものものと混ぜないように⁸⁶⁾注意された。乳母志願者は、医者からの証明書が必要で、インノチェンティにいる間は医師の診断を続けて受けることが義務付けられていた。1887年から、外部の乳母は15日ごとに、町の嘱託医の診断を受けなければ給与返済⁸⁷⁾が求められ、1917年には梅毒の感染予防に人工乳を与えるようになった⁸⁸⁾。

このように「鉄格子の窓」が閉鎖されて以降のインノチェンティは、事務所を通して子どもを受け入れるようになり、福祉施設として内務省管轄になった。入所の手続きや受け入れる基準なども国の基準(法律)に従うことが求められていたが、そこに抜

け穴があったことはすでに示した。法律のソフトな運用を利用しながらも、福祉の枠組みにある孤児院の役割として、できるだけ多くの子どもを救い、よりよい養護を与えるようにしたインノチェンティの姿を見ることができる。

おわりに

以上のように、インノチェンティ協会が示す4つの時代区分ごとに、インノチェンティ捨子養育院に捨てられた幼児の生活の様子や宗教、男女をめぐる因習、大公令、国の法律などから、子どもに対する養護はどのような意味を持っていたのか、つまり養護の背後にある意図や枠組、または指針はなんだったのかを明らかにする試みであった。

これは、インノチェンティ捨子養育院の子どもを養護する立場の大人たちがどこに身を置いていたのかということにもつながる。第1期(1419年から1580年)は、ちょうどイタリア・ルネサンス期にあたり、豪華な市民の生活の裏にある神への許しと救済を求めるための養護と位置付けた。第2期(1580年から1700年)は、第1期と打って変わり、インノチェンティの子どもたちは質素で厳しい生活を強いられる中で、受肉化した神の子イエスのシンボルとしての養護と位置付けた。どちらの時期も、まだキリスト教が人々の生活の中心を占めており、生活や行動の規範になっていた。この時代の多くのホスピタルの部屋の構造は、部屋の中央に宗教的な祭壇があり、どこからでも祭壇を見ることができる大部屋だったという⁸⁹⁾。第3期(1700年から1875年)は、科学の進歩で、宗教が以前と比べてそれほど中心に位置づけられなくなり、科学の進歩の恩恵を受けて子どもを科学的に養護できるようになった。第4期(1875年から1900年)に至っては、福祉として国の枠組みに入り、子どもを受け入れるためのインノチェンティの門や、受け入れたばかりの子どもを診察するための待機部屋、そして病気の種別ごとの子ども部屋など、物理的な環境の変化により、子どもの養護をより現代的で確実なものとするようになってきたと考えられる。

時代の意味は違え、これらの手厚い養護について考えると、一般に言われる子どもへの愛情はフィレンツェではインノチェンティ捨子養育院が創設された15世紀初期から存在したのか、という問いに至ると同時に、子どもを手厚く養護したのは養育者自身

が自己の救済を目的としていたのではないかととれる。しかしながら、推測するだけで本当のことはわからない。最後に、イタリア・ルネサンス当時の中心的役割を果たしたメディチ家を例に、この疑問を投げかけたい。

アリエスによると「子どもの発見」は17世紀から始まるとし、その根拠として、それ以前は子どもが絵画に描かれることはなかったからだとしている⁹⁰⁾。アリエスが16世紀に子どもが描かれた特殊な例として、家族の肖像画の中に死亡した子どもの姿が描かれているホルバインの「マイヤー市長とその家族」(1521年)を挙げている⁹¹⁾。この絵画は家族の中の子どもとして描かれ、子ども一人の肖像画ではない。一人の子どもが描かれた肖像画は、ベラスケスが描いたスペイン王家の「マルゲリータ王女」の肖像画があるが、17世紀を待たなくてはならない。しかしメディチ家には、1542年頃とされるコシモ・デ・メディチ(コシモ1世)の娘ピア・デ・メディチの肖像画が存在している。コシモの正式な結婚によって生まれた娘ではなく、高貴な女性との間に生まれた庶子であり、ピアが亡くなった後にピアを偲んでコシモが当時の著名な画家ブロンズイーノに描かせた肖像画だという。また、ピアのデスマスクから描き起こされたものだと推測されている⁹²⁾。この時代に大人の女性の肖像画ではなく、5、6歳の子どもの庶子で、しかも女兒一人の肖像画はアリエスも気付かなかつたまれな例であろう。フィレンツェの上流階級では、他のヨーロッパ諸国に比して早くから子どもへの愛情があったのだろうか。今後の問いとしたい。

注

- 1) Spedale はフレンツェ語で、Ospedale と同義。日本では一般的に「インノチェンティ捨子養育院」という翻訳が定着しているため、この訳語で統一する。
- 2) Il Seicentenario dell'Istituto degli Innocenti. <https://www.istitutodegliinnocenti.it/content/il-seicentenario-dellistituto-degli-innocenti> (2019年8月3日閲覧)
- 3) 共同研究者三森のぞみ氏によるインノチェンティ捨子養育院視察報告書(2019年9月10日)から
- 4) 前之園幸一郎、「フィレンツェにおけるインノチェンティ捨子養育院の創設とその発展について」『青山学院女子短期大学紀要』第49巻、1995年、p.53-77.
- 5) 前之園幸一郎、「18世紀フィレンツェのインノチェンティ養育院における捨子の養育について」『青山学院女子短期大学紀要』第50巻、1996年、p.49-66.
- 6) 前之園幸一郎、「フィレンツェ・インノチェンティ捨

て子養育院の創設初期における子どもたち」『青山学院女子短期大学紀要』第52巻、1998年、p.59-84.

- 7) Balie e Bambini は、15世紀頃までは Balie e Fanciulli, Barie e Fanciugli と表記されている記録もある。
- 8) 高橋、『捨児たちのルネッサンス—15世紀イタリアの捨児養育院と都市・農村—』名古屋大学出版会、2000.
- 9) Bruscoli, Gaetano. *Lo spedale di Santa Maria degli'Innocenti di Firenze dalla sua fondazione ai giorni nostri*. E. Ariani, Firenze, 1900.
- 10) Sandri, Lucia. *L'attività di banco di deposito dell'Ospedale degli Innocenti. Don Vincenzo Borghini e la 'bancarotta' del 1579*, in *L'uso del denaro. Patrimoni e amministrazione nei luoghi pii e negli enti ecclesiastici (secoli XV-XVIII)*, a cura di A. Pastore e M. Garbellotti, il Mulino, Bologna 2001, pp. 153-178.
- 11) Istituto degli Innocenti di Firenze, *Gli Innocenti e La Città. L'Ospedale delle origini al Granducato mediceo*. MUDI, Firenze, 2008. p. 5.
- 12) *Figli D'Italia. Gli Innocenti e la Nascita di un Progetto Nazionale per L'Infanzia (1861-1911)*, a cura di Stefano Filippini, Eleonora Mazzocchi, Lucia Sandri. ALINARI 24 Ore, Firenze, 2011. (以下、*Figli D'Italia*. と略す) なお使用した9編の論文は参考文献に示した。
- 13) *Il Museo degli Innocenti*, Mandragora, Firenze, 2016. (以下、*Il Museo*. と略す)
- 14) Sandri, Lucia. *L'infanzia a Firenze nel XV e XVI secolo: un itinerario nello "Spedale"*. in Istituto degli Innocenti di Firenze, *Il Rinascimento dei Bambini. Gli Innocenti e l'accoglienza dei fanciulli tra Quattrocento e Cinquecento*. MUDI, Firenze, 2007. (以下、*Il Rinascimento*. と略す)
- 15) Sandri, Lucia. *L'Ospedale degli Innocenti dalle origini al Granducato mediceo: la fabbrica, la committenza artistica*. in Istituto degli Innocenti di Firenze, *Gli Innocenti e La Città. L'Ospedale delle origini al Granducato mediceo*. op. cit. (以下、*La Città*. と略す)
- 16) Cronologia, *Il Museo op.cit.*
- 17) Sandri. op. cit., in *Il Rinascimento op. cit.*, p. 9.
- 18) *ibid.* p. 19.
- 19) Sandri, Lucia. *1419-1580 Dalla Fondazione al priorato di Vincenzo Borghini*. in *Il Museo op. cit.*, p. 21.
- 20) piero はパチーニの父の名前。当時は父の名前をミドルネームとして、同姓同名の他者から区別した。例えば前述のフランチェスコ・ダティーニの正式名は、マルコという父親の名前を入れて Francesco di Marco Datini である。
- 21) Sandri. op. cit., in *Il Rinascimento op. cit.*, p. 19.
- 22) フィレンツェ歴は3月25日から新年が始まる。Sandri. op. cit., in *ibid.*, p. 14.
- 23) *ibid.*
- 24) n. 3. AOIF. *Balie e fanciugli. A(1444-1451)*. 485, c. 2. in *ibid.*, p. 24.
- 25) Sandri. op. cit., in *ibid.*, p. 12.
- 26) *ibid.*, p. 13.
- 27) Sandri. op. cit., in *Il Museo op. cit.*, p. 21.
- 28) Sandri. op. cit., in *Il Rinascimento op. cit.*, p. 14.
- 29) Sandri. op. cit., in *Il Museo op. cit.*, p. 21.

- 30) Sandri. *op. cit.*, in *Il Rinascimento op. cit.*, p. 13.
- 31) *ibid.*, p. 14.
- 32) *ibid.* e Sandri. *op. cit.*, in *Il Museo op. cit.*, p. 21.
- 33) Sandri. *op. cit.*, in *Rinascimento op. cit.*, p. 15.
- 34) *ibid.*
- 35) *ibid.*, p. 16.
- 36) *ibid.*, p. 17.
- 37) Sandri. *op. cit.*, in *Il Museo op. cit.*, p. 21.
- 38) Sandri. *op. cit.*, in *Il Rinascimento op. cit.*, p. 18.
- 39) *ibid.*
- 40) *ibid.*
- 41) *ibid.*
- 42) *ibid.*
- 43) *ibid.*, p. 7.
- 44) *ibid.*, p. 8.
- 45) SAVONAROLA, Girolamo. Treccani, Dizionario Biografico degli Italiani - Volume 91 (2018), di Stefano Dall'Aglio. http://www.treccani.it/enciclopedia/girolamo-savonarola_%28Dizionario-Biografico%29/ (2019年9月8日閲覧)
- 46) Sandri. *op. cit.*, in *Il Rinascimento op. cit.*, p. 11.
- 47) Sandri, Lucia. 1580-1700. *Gli Innocenti durante la Controriforma*. in *Il Museo op. cit.*, p. 26. Sandri, Lucia, *Gli Innocenti e Orbatello nel XVIII et XIX secolo: "nocentine" e "gravide occulte" tra progetti e necessità istituzionale*. in a cura di C. De Benedictis e C. Milloschi, *L'Ospedale di Orbatello. Carità e Arte a Firenze*. Edizioni Polistampa, Firenze, 2015, pp. 137-145. にオルバテッロ・ホスピスが時代とともに変わっていく役割について詳しい。
- 48) Sandri. *op. cit.*, in *Il Museo op. cit.*, p. 26.
- 49) *ibid.*
- 50) Sandri. *op. cit.*, in *Il Rinascimento op. cit.*, p. 17.
- 51) *ibid.* p. 13. e Sandri. *op. cit.*, in *La Città op. cit.*, p. 12.
- 52) Sandri. *op. cit.*, in *La Città op. cit.*, p. 12.
- 53) Sandri, Lucia. 1700-1900. *Progresso scientifico, riforme e chiusura della ruota. Da ospedale a brefotrofo*. in *Il Museo op. cit.*, p. 31.
- 54) Corsini, Carlo A. *Gli Innocenti nell'Ottocento fino alla chiusura della ruota*. in *Figli D'Italia op. cit.*, p. 27.
- 55) フィレンツェの外国支配については、トレッカーニ電子版の以下のサイトを参照した。
 Francesco I di Lorena imperatore,
<http://www.treccani.it/enciclopedia/francesco-i-di-lorena-imperatore/>
 Lorena, duchi di,
<http://www.treccani.it/enciclopedia/duchi-di-lorena/Toscana, Granducato di>,
<http://www.treccani.it/enciclopedia/granducato-di-toscana/>
 Firenze. 6. IL GRANDUCATO DI TOSCANA.
<http://www.treccani.it/enciclopedia/firenze/>
 Maria Luisa d'Asburgo-Lorena,
http://www.treccani.it/enciclopedia/maria-luisa-d-asburgo-lorena_%28Dizionario-di-Storia%29/
 (2019年9月15日閲覧)
- 56) Sandri, Lucia, *Tipologie e avvicendamenti governativi agli Innocenti nella prima metà dell'Ottocento. Il governo dei commissari verso l'Unità*. in *Figli D'Italia op. cit.*, p. 22.
- 57) *ibid.*
- 58) *ibid.*, p. 24.
- 59) *ibid.*, p. 23.
- 60) Corsini. *op. cit.*, p. 28.
- 61) *ibid.*
- 62) Firenze (Sito di Treccani) *op. cit.*
- 63) Corsini. *op. cit.*, p. 32.
- 64) Ragazzini, Alessia. Romboli, Dario, *Evoluzione delle funzioni e interventi sulla fabbrica dell'ospedale dopo l'Unità*. in *Figli D'Italia op. cit.*, p. 86.
- 65) Bortolotto, Maria. Viazzo, Pier Paolo. *Gli esposti dell'Ospedale degli Innocenti dopo la chiusura della ruota*. in *Figli D'Italia op. cit.*, p. 73.
- 66) Sandri. *op. cit.*, in *Figli D'Italia op. cit.*, p. 23.
- 67) Cronologia, in *Il Museo op. cit.*
- 68) Sandri. *op. cit.*, in *ibid.*, p. 31.
- 69) Sandri, Lucia. *Gli Innocenti dopo l'Unità. Il consiglio di amministrazione e i commissari-direttori al governo del brefotrofo*. in *Figli D'Italia op. cit.*, p. 61.
- 70) *ibid.*, p. 62.
- 71) Ricciardi, Lucia. *Accoglienza e percorsi di vita, dopo la chiusura della ruota*. in *Figli D'Italia op. cit.*, p. 101.
- 72) *ibid.*
- 73) *ibid.*, p. 102.
- 74) *ibid.*, p. 102-103.
- 75) Guarnieri, Patrizia. *La modernizzazione medica nell'Istituto degli Innocenti*. in *Figli D'Italia op. cit.*, p. 91-92.
- 76) Ricciardi. *op. cit.*, p. 103.
- 77) Ragazzini e Romboli. *op. cit.*, p. 83.
- 78) *ibid.*, p. 85.
- 79) Guarnieri. *op. cit.*, p. 96.
- 80) Ragazzini e Romboli. *op. cit.*, p. 85.
- 81) Guarnieri. *op. cit.*, p. 96.
- 82) *ibid.*, p. 94.
- 83) *ibid.*, p. 97.
- 84) *ibid.*, p. 99.
- 85) *ibid.*, p. 97.
- 86) Ricciardi. *op. cit.*, p. 103.
- 87) *ibid.*, p. 104.
- 88) Bortolotto e Viazzo. *op. cit.* in *Figli D'Italia op. cit.*, p. 74.
- 89) Sandri. *op. cit.*, in *Il Rinascimento. op. cit.*, p. 12.
- 90) アリエス, フィリップ (訳: 杉山光信, 杉山恵美子) 『〈子供〉の誕生 アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』 みすず書房、1980年、p. 35.
- 91) 前掲書、p. 42.
- 92) アイケ, D. シュミット (学術総監修: ウフィツイ美術館館長) 『遙かなるルネサンス-天正遣欧少年使節がたどったイタリア』 東京富士美術館発行、図録解説より。2017, p. 46-47.

参考文献

Bortolotto, Maria. Viazzo, Pier Paolo. *Gli esposti dell'Ospedale degli Innocenti dopo la chiusura della ruota*. in *Figli D'Italia. Gli Innocenti e la Nascita di un*

- Progetto Nazionale per L'Infanzia (1861-1911)*, a cura di Stefano Filipponi, Eleonora Mazzocchi, Lucia Sandri. ALINARI 24 Ore, Firenze, 2011. p. 69-75.
- Corsini, Carlo A. *Gli Innocenti nell'Ottocento fino alla chiusura della ruota*. in *Figli D'Italia op. cit.*, p. 27-33.
- Da Molin, Giovanna. *Le prime politiche nazionali per l'assistenza e la tutela dell'infanzia abbandonata* in *Figli D'Italia op. cit.*, p. 53-60.
- Guarnieri, Patrizia. *La modernizzazione medica nell'Istituto degli Innocenti*. in *Figli D'Italia op. cit.*, p. 91-100.
- Il Museo degli Innocenti*, Mandragora, Firenze, 2016.
- Ragazzini, Alessia. Romboli, Dario. *Evoluzione delle funzioni e interventi sulla fabbrica dell'ospedale dopo l'Unità*. in *Figli D'Italia op. cit.*, p. 83-90.
- Ricciardi, Lucia. *Accoglienza e percorsi di vita, dopo la chiusura della ruota*. in *Figli D'Italia op. cit.*, p. 101-108.
- Ricciardi, Lucia. *Accoglienza e percorsi di vita prima della chiusura della ruota*. in *Figli D'Italia op. cit.*, p. 43-48.
- Sandri, Lucia. *Gli Innocenti dopo l'Unità. Il consiglio di amministrazione e I commissari-direttori al governo del brefotrofo*. in *Figli D'Italia op. cit.*, p. 61-67.
- Sandri, Lucia. *Gli Innocenti e Orbatello nel XVIII et XIX secolo: "nocentine" e "gravide occulte" tra progetti e necessità istituzionale*. in a cura di C. De Benedictis e C. Milloschi, *L'Ospedale di Orbatello. Carità e Arte a Firenze*. Edizioni Polistampa, Firenze, 2015, p. 137-145.
- Sandri, Lucia. *L'infanzia a Firenze nel XV e XVI secolo: un itinerario nello "Spedale"*. in Istituto degli Innocenti di Firenze, *Il Rinascimento dei Bambini. Gli Innocenti e l'accoglienza dei fanciulli tra Quattrocento e Cinquecento*. MUDI, Firenze, 2007.
- Sandri, Lucia. *L'Ospedale degli Innocenti dalle origini al Granducato mediceo: la fabbrica, la committenza artistica*. in Istituto degli Innocenti di Firenze, *Gli Innocenti e La Città. L'Ospedale delle origini al Granducato mediceo*. MUDI, Firenze, 2008.
- Sandri, Lucia. *Tipoogie e avvicendamenti governativi agli Innocenti nella prima metà dell'Ottocento. Il governo dei commissari verso l'Unità*. in *Figli D'Italia op. cit.*, p. 21-26.
- アイケ, D. シュミット (学術総監修: ウフィツイ美術館館長) 『遙かなるルネサンス—天正遣欧少年使節がたどったイタリア』東京富士美術館発行、2017.
- アリエス, フィリップ (訳: 杉山光信、杉山恵美子) 『〈子供〉の誕生 アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』みすず書房、1980年。
- 高橋友子、『捨児たちのルネサンス—15世紀イタリアの捨児養育院と都市・農村—』名古屋大学出版会、2000。
- 前之園幸一郎、「フィレンツェにおけるインノチェンティ捨て子養育院の創設とその発展について」『青山学院女子短期大学紀要』第49巻、1995年、p. 53-77.
- 前之園幸一郎、「18世紀フィレンツェのインノチェンティ養育院における捨子の養育について」『青山学院女子短期大学紀要』第50巻、1996年、p. 49-66.
- 前之園幸一郎、「フィレンツェ・インノチェンティ捨て子養育院の創設初期における子どもたち」『青山学院女子短期大学紀要』第52巻、1998年、p. 59-84.
- SAVONAROLA, Girolamo. Treccani, Dizionario Biografico degli Italiani - Volume 91 (2018), di Stefano Dall'Aglio. http://www.treccani.it/enciclopedia/girolamo-savonarola_%28Dizionario-Biografico%29/ (2019年9月8日閲覧)
- Francesco I di Lorena imperatore, <http://www.treccani.it/enciclopedia/francesco-i-di-lorena-imperatore/> (2019年9月15日閲覧)
- Lorena, duchi di, <http://www.treccani.it/enciclopedia/duchi-di-lorena/> (2019年9月15日閲覧)
- Toscana, Granducato di, <http://www.treccani.it/enciclopedia/granducato-di-toscana/> (2019年9月15日閲覧)
- Firenze. 6. IL GRANDUCATO DI TOSCANA. <http://www.treccani.it/enciclopedia/firenze/> (2019年9月15日閲覧)
- Maria Luisa d'Asburgo-Lorena, http://www.treccani.it/enciclopedia/maria-luisa-d-asburgo-lorena_%28Dizionario-di-Storia%29/ (2019年9月15日閲覧)

本研究は、JSPS 科研費17KO4263の助成を受けた共同研究『伊・瑞の子どもの権利基盤型アプローチに学び、日本の社会的養護の向上をめざす試み』(研究代表者: 川名はつこ)である。